

# ボヘミアの海岸

## シェイクスピアと中欧

ユートピアが描かれていない地図は見るにあたらしいない。

オスカー・ワイルド

大橋 洋一

---

リチャード二世から始まる

のちに百年戦争と呼ばれる英仏戦争を始めたイングランド王はエドワード三世、その長男は父親よりも先に死亡したが英傑の誉れ高かった黒太子エドワード、そしてそのエドワードの息子がリチャード二世 (Richard II 1367-1400 (在位 1377-99))。リチャード二世が妃にボヘミア王の王女 (英国名ではアン・オヴ・ボヘミア 1366-1394 (王妃 1382-94)) を迎えたときにイングランドとボヘミアとの公式の政治的文化的交流が始まる (Dussen 2012)。このアン王妃が持っていたチェコ語訳の聖書に触発されて、ウィクリフによる最初の英語訳聖書が生まれ、それを端緒として発生するカトリック批判は、ボヘミアにおけるフス派の反乱と連動することになる。さらに時代を下ってシェイクスピアの時代、ジェームズ一世の王女エリザベスとファルツ選帝侯 (神聖ローマ帝国において皇帝を選挙する資格をもつ七人の聖職者・有力貴族のひとり) フレデリックとの婚姻は、ファルツ選帝侯がボヘミア王に選出され、三十年戦争初期におけるプロテスタント側の指導者に祭り上げられることで新たな展開を迎える。冬の王と王妃の娘ゾフィーは、ハノーファー選帝侯 (この時期、九番目の選帝侯となった) と結婚、その息子が、のちのイングランド王ジョージ一世となる。そして現在英国の王室の出自が、ハノーファー／ハノーヴァー系であってみれば (ただし 1917 年、ジョージ五世は、王朝名がドイツ系であることを露骨に示すのは適切ではないと考え、「ウインザー」を王家の姓として採用し、ウインザー朝が誕生し、それが現在にいたる)、ボヘミアとの関係なくして、現在の英国王室そのものもあり得なかったことになる。

ジェームズ一世の娘エリザベスとファルツ選帝侯の婚礼の祝典 (1613) で上演された戯曲のひとつにウィリアム・シェイクスピアの単独作としては最後の『テンペスト』 *The Tempest* があった。20 世紀の世紀末近くに英米圏で批評潮流となった新歴史主義あるいはポストコロニアリズムにおいて、シェイクスピア時代における新大陸表象の一例として、あるいは植民地主義的イデオロギーの顕在化として特権的地位を享受することになったこの作品『テンペスト』には、奇しくも当時の中央ヨーロッパにおける政治情勢が影を落としている。この作品では主人公のミラノ大公プロスペロが、弟の陰謀によって国を追われる。シェイクスピア作品では、兄

が弟によって、その地位を追われたり、敗北したり、時には殺されたりすることはよくある。たとえば『ハムレット』において先代のハムレット王は自分の弟に殺される。『リチャード三世』でエドワード四世は弟リチャード（のちの三世）の陰謀によって王子たちを殺される。『お気に召すまま』では最初から長兄と末の弟との仲が悪い。喜劇なので、ふたりが最後に和解するとしても、その間の兄と弟の確執は激しい。『テンペスト』においても主人公のプロスペロが弟のアントニオによってミラノ公としての地位を追われる——まさに、おなじみの兄と弟との確執が展開する。しかし、意図的か偶然かは定かでないが、プロスペロが魔術師であり、弟に政務をまかせて魔術にうつつをぬかしているうちに弟に地位を奪われるという展開は、上演当時にボヘミアで起きていた事件、神聖ローマ帝国皇帝で、首都をウィーンからボヘミアのプラハに移動させて、そこで魔術の帝都を築いたルドルフ二世（Rudolf II 1552-1612（ボヘミア王 1575-; 神聖ローマ帝国皇帝 1576-1612））が、弟のマティアス（Matthias 1557-1619（在位 1612-19））によって皇帝位から引きずり降ろされるという「ハプスブルク家の兄弟争い Ein Bruderzwist im Hause Habsburg<sup>1</sup>」（1612）とあまりにも符号している。ジェームズ一世の王女エリザベスとファルツ選帝侯フレデリックが、ボヘミア王と王妃となり三十年戦争（1618～）にまきこまれる運命にあったことまでは、さすがに婚礼の祝典の際には誰も予想だにしていなかったであろうが（予想したのがイエイツ（1975,1980）であり、この予想こそが、その考察の瑕疵となった）、神聖ローマ帝国内で起こった、この事件については、当時かなり正確に情勢把握されていたのではないかと思われる。また、そのくらいに中央ヨーロッパとイングランドとは、緊密な連動を発現させていたとも言えるのだ。

### ボヘミアの海岸で

だがイングランドとボヘミアとの緊密な関係の証左としてシェイクスピアあるいはその演劇作品を例として掲げることは苦笑、いや嘲笑をもって迎えられるかもしれない。なぜなら、ボヘミアに関して、シェイクスピアは知というよりも無知の代表でもあるからだ。シェイクスピアの晩年の劇『冬の夜話』<sup>2</sup>には、あろうことか、ボヘミアの海岸が出現する。その経緯をここで、あらためて確認しておきたい。

『冬の夜話』は最初シチリアで幕を開ける。シチリアの王レオンティーズは、この地に逗留して九箇月をすぎようとしていた幼馴染のポリクシニーズ（ボヘミア王）とシチリア王妃ハーマイオニー（ロシア皇帝の娘）との不倫関係を突如疑いはじめる。嫉妬の妄想に苦しむなかレオンティーズは王妃を投獄する。ボヘミア王ポリクシニーズは、シチリアの廷臣の助けもあって、からくもボヘミアにむけて脱出する。レオンティーズは、神アポロンによる裁定にすべてをゆだねるが、王妃の裁判のなか、明かされた神託の内容は、不倫の事実を全面否定するものだった。だが、若い王子マミアスは、両親の不和に心を痛め命を失っていた。王子の死の知らせに王妃ハーマイオニーも失神（のちに絶命したと告げられる）。だが悲劇はまだ終わらなかった。ハーマイオニーが投獄中に出産した赤ん坊を、不義の子とみなしたレオンティーズは、神託が到着する前に、その子を家臣のアンティゴナスに殺すように命じていた。



ク) を目指す主人公のヘレン (3.4.4-) はフランスのルシヨンから西ではなく、あろうことか東にフィレンツェまで行くのだ (3.5)。この限りでは地理的正確さをシェイクスピアに求めてはならない。また、そうであればこそ、『冬の夜話』の原作となったグリーンの『パンドスト』に登場する「ボヘミアの海岸」を、無批判、無自覚に踏襲したのも当然のこのように思われる。

ロバート・グリーンは、その遺著でシェイクスピアのことを成り上がり者のカラス (イソップ寓話になぞらえた) と批判して歴史に名を残しているのだが、シェイクスピアより一世代前の大学才人の一人で多くの散文作品と劇作品を残した当時としては大作家である。その中編物語『パンドスト』は、ボヘミアで幕をあける<sup>6</sup>。ボヘミア王パンドスト Pandosto (以下、カッコ内に『冬の夜話』に相当する登場人物名を表記、この場合は、シチリア王レオンティーズ) は、王妃ベラリア Bellaria (ハーマイオニー) と逗留中の幼馴染でシチリアの王イージストス Egestus (ポリクシニーズ) との性的関係を疑いはじめめる。身の危険を感じたイージストスはボヘミアの廷臣の奨めもあってシチリアに帰国。王妃を投獄したパンドストはアポロンの神託による裁決を待つことになる。結果は『冬の夜話』と同じ。衝撃と悲嘆で息子と王妃は落命する。一方、王妃の生まれたばかりの赤ん坊は小舟に乗せられ (ボヘミアの首都には港があるかのような書き方をされている) 海に流されるが、丸二日漂流したあと、運よく、シチリアの岸辺 ('the Coast of Sycilia', Bullough 173) に漂着する。その地で、羊飼いに拾われた赤ん坊は、フォーニア Fawnia (パーディア) と名付けられ、羊飼い夫婦の娘として育てられて16年後、彼女に恋をしたシチリアの王子ドラストス Drastus (フロリゼル) は結婚に反対されることを知り、彼女と駆け落ち同然にシチリアを船で去る。途中、大きな嵐に出会い、乗っている船が沈みそうになるが、からくも、嵐が収まり、行く手にボヘミアの海岸 ('the coast of Bohemia', Bullough 191) を見るのである<sup>7</sup>。

シェイクスピアはグリーンの物語の設定を律儀に踏襲したように思われるのだが、それならばシェイクスピアは、グリーンのように、ボヘミアからシチリアへ、そしてまたボヘミアへという展開をとらず、シチリアからボヘミアへ、そしてボヘミアからシチリアへとなぜ逆行したのか。ただボヘミアとシチリア、物語の起点をどちらにしても、途中で赤ん坊フォーニア/パーディアが羊飼いに拾われるという設定は必要で、拾われるためには、海岸が求められた。しかし、だから、しかたがないとか、物語の便宜上の処置だとして片づけられない問題がある。なぜなら、グリーン原作通り、シチリアの海岸にフォーニア/パーディアが漂着したことにして、最後にシチリアからボヘミアへと逃れるとき、物語ではなく劇作品であるから、人物の誰かの語りによって簡略に行程を報告することで済ませることができる (事実『冬の夜話』では、第四幕から第五幕にかけての、シチリアへの旅は、ただ報告されるだけである)。であるならば、シェイクスピアは恥さらしな「ボヘミアの海岸」を消すことができただろう。しかるに起点をシチリアにもってきて、途中でボヘミアの海岸をこれ見よがしに出してきている。なぜか。



## イマーゴ・ムンディ

ささいなことだが『冬の夜話』で、ハーマイオニーの彫像はイタリアの実在した芸術家ジュリオ・ロマーノ (Guilio Romano 1499-1546) が造ったという設定になっているが、ロマーノはイタリアのマニエリスム芸術家で、建築家で絵画も残したが、彫刻家ではない<sup>8</sup>。この程度の現実・歴史無視あるいは誤解は、許容範囲であり、実のところ、現代の歴史小説や時代小説では、もっと大胆な歴史改変すら厭われていないとも言える。そしてその程度のこととして「ボヘミアの海岸」が処理できる可能性はいっばうに存在しつつ、いまみてきたようにシェイクスピアは消すこともできた「ボヘミアの海岸」あえて出現させていることで、つまり変更や修正を加えるかみえて、むしろ問題を大きくさせているようにみえることが不思議なのだ。『冬の夜話』のラスト、死んだハーマイオニーを記念する彫像が披露されるが、それが実は生きていたハーマイオニーの扮装であり、彼女が動きはじめるとき、自動人形が生命をもつような魔術的奇跡が出現するのだが、これはまさに魔術の帝国ボヘミアの首都プラハのルドルフ二世の宮廷にこそふさわしい事件であり、いっばう後半の羊の毛刈り祭りという牧歌的出来事は、熊が似合うボヘミアではなく地中海のシチリアにこそふさわしいのに、演劇作品では逆になっている。たんなる誤謬でも捏造でも、ごちない改変、偽りの処理でもなく、重ね書きされたもうひとつ可能世界を意識させる二重性が仕込まれているのではないか。

それはシェイクスピアの地理 (Theatrum Mundi) が劇場 (Theatre of the World) と通底することからもいえる<sup>9</sup>。劇場は、そのコンセプトにおいてコスモロジーに支えられながら、ジオグラフィー的でもある。だとすれば、シェイクスピアの演劇においては、一方で新地理 (ジオグラフィー) が、古代・中世の旧世界詩学 (コスモロジー) という基盤から立ち上がるが、その一方で、新地理が旧世界詩学に飲み込まれることもある (Gillies 1994:35-36)。劇場とは、現実の何もない空間たる舞台の上に、虚構をたちあげ架空の世界を幻視させるものである——現実のうえに虚構が、世界 (ジオグラフィー) のうえに劇場 (コスモロジー) が立ち上がる。と同時に、劇場はまた、虚構 (コスモロジー) が現実 (ジオグラフィー) を支え、演劇 (世界劇場) が世界 (世界地図) を支え意味づける可能性を垣間見せる。そこではコスモロジーとジオグラフィーの相互作用が実現する。現実から立ち上げられる演劇はまた、演劇から現実がたちあがることも示す——それがメタドラマ的観点。であるのなら、シェイクスピア劇は、メタドラマ的観点を利用して、虚構が、夢が、妄想が、幻想が、現実浸透し、現実を支えていることを絶えず認識させる装置に満ちている。ボヘミアの海岸も、いうなれば、そのような装置である。ただしそれは、虚構一般、妄想的あるいは無知による投影が、現実を構築するというメタフィクショナル的覚醒装置というにとどまらない。これは、ボヘミアの地理のうえに海岸をむりやりもつてくると同時に、ボヘミアを海のなかに、海岸のある孤島としても意味づける装置でもある。中央ヨーロッパに重ね書きされた海はまた、海のなかにボヘミアの地を重ね書きもするという双方向的相互作用を実現させている。ボヘミアの海岸は、たとえシェイクスピアのイングランド限定であったとしても、ボヘミアを意味づけるイマーゴ・ムンディのなかでは、ボヘミア島を形成することになったのである。

## アルカディアにあり

エヴァンスの『ルドルフ二世とその世界』（日本訳題『魔術の帝国——ルドルフ二世とその世界』）は、英米圏においては、いまなおルドルフ二世時代のボヘミアの文化を知るときには基本文献だが、これを参照して、イングランドとボヘミアとの政治的文化的交流において重要な役割を果たした人物を選抜すれば（もちろん文化交流がこの文献における考察目的ではないし、またのどのページを開いても見開きで二桁を超える数の人名が言及されるような記述は、そこに方法論上の問題も指摘できるのだが、それは無視して、ネットワークや関係性を重視していることを確認できるし、そうであるのなら個々人への関心は希薄であることも承知したうえで話として）、以下のようになろう。ジョン・ディーと、その弟子・協力者エドワード・ケリー、またジョン・ディーに教えを乞うていたフィリップ・シドニー。英国出身でプラハで活躍した女性詩人エリザベス・ウェストン。そしてやや扱いが軽いエドモンド・キャンピオン。

このなかではジョン・ディー John Dee(1527-1608) が、イングランドのみならずヨーロッパ全体に知られた魔術師・錬金術師としてもっとも重要な人物であろう。ポーランドの大領主アルフレッド・ワスキを庇護者にし、またマクシミリアン二世にも拝謁したことのあるディーは、1584年にプラハを訪れ、最終的に1589年までボヘミアの地にとどまることになる。エドワード・ケリー Edward Kelley(1555-1597) は、ジョン・ディーの弟子もしくは協力者として活動し、最終的には錬金術師として師をしのぐ名声を博してルドルフ二世に召し抱えられることになる。1589年イングランドに帰国するディーとは別にケリーは、プラハに旅立つ。このときケリーに同行したのがエリザベス・ジェイン・ウェストン Elizabeth Jane Weston(1582-1612)。イングランド出身ラテン語詩人として盛名をはせることになる彼女はエドワード・ケリーの養女であり、ケリーとともにプラハに移住した。そしてルドルフ二世の時代にもっとも著名なイングランドの宮廷人詩人となれば、当時、ヨーロッパ全体に名をはせたといっても過言ではないフィリップ・シドニー Philip Sidney(1554-96) だが、1572年にイングランドの交渉使節団の一員として大陸に渡ってから、ヨーロッパの著名人と交流し、名声を広げるとともに、マクシミリアン二世崩御の際にはエリザベス女王の名代として葬儀に参列した。プラハ訪問に際してはディーからも教えを受けていた。そしてルドルフ二世との謁見に臨むが、印象はよくなかったようだ。しかしルドルフ二世にしても、自分と年齢もかわらないシドニーに対し（1552年生まれのルドルフに対し、シドニーは1554年生まれ）、さほど感銘を受けなかったかもしれないと想像できる。なにしろこの時期、プラハにはイングランド出身のイエズス会士がいて、その説教の内容と語り口は、雄弁家・詩人として知られたシドニーの顔色なからしめるものであったにちがいないからだ(Thomas 2007:173-74)。そのイエズス会士とは、私が学生の頃は名前を聞いたこともなかったのだが、いまや、シェイクスピアの伝記には必ず登場するようになった殉教者エドモンド・キャンピオン Edmund Campion(1540-81)。シェイクスピア＝カトリック説が重視されるにつれ、シェイクスピア自身がキャンピオンに直接会っていた可能性も示唆されるほどになった(グリーンブラット 2005,2006 参照)。残念ながらエヴァンズの本は、キャンピオンならびにイエズス会の活動について割くページが少ないのだが、今だったら、そのようなことはありえ

ず、やや隔世の感がある。しかし、チャンピオンの扱いが少ないのは、それ以外にも、理由がある。おそらく宗教的な理由が。

エヴァンズはシドニーに対してこう述べている——「彼はオカルティストのジョン・ディーの弟子であり、またジョルダノ・ブルーノとその門弟であるアレグザンダー・ディクソンの庇護者であるが、同時にラムス学徒でもあった——彼はラムスとパリで知りあい、ラムスの死に際してはラムス主義の宣伝小冊子を彼に捧げている。ダニエル・ロジャーズの友人であり、リップシウスとも親しかったシドニーは、1570年代と80年代にネーデルランドにおける協調主義運動と深くかかわっていた——シドニーの短い生涯最後の時期に、リップシウスは宗教上の急進主義に憤りを示す書簡をシドニーに送っている。ノユバル・ランゲとの親交は〈おそらく、シドニーの生涯において、最も重要な唯一の影響〉といわれており〔中略〕シドニーは1573年にオーストリアを訪れており、当時に数ヶ月滞在して、クラート、クルシウス、ラザルス・シュヴァンディ、帝国御用メダル意匠家アントニオ・ボンディなどと交流を深めた。翌年彼はポーランドとモラヴィアを訪問し、1575年にはプラハに赴いた。二年後の1575年には、マクシミリアンの死去に伴うエリザベス女王の公式弔問団代表として再びプラハの地を踏む……」（エヴァンズ 155）。ふたつのパラグラフのなかに羅列されている人名を逐一解説するだけで論文一本の分量を超える（繰り返すが、こうした記述スタイルとその方法論の是非は問わない）。ただ、シドニーのイメージ構築において興味深いのは、著者が、構築せんとするルドルフ二世の帝国の思想的文化的な全体像を補強すべく、イングランドにおける好戦的なプロテスタントの貴公子のイメージは退け、そのかわりに教会分裂を憂い寛容な協調主義を志向する人文主義者・文学者として側面を強調するのだ。ここで参照されているラムス（Petrus Ramus 1515-1572）、ランゲ（Hubert Languet 1518-1581）、リップシウス（Justus Lipsius 1547-1606）といった、当時のヨーロッパにおける聖職者、政治家、思想家たちは、いずれもラディカルな教会分裂派ではなく、協調と融和を目指す穏健な寛容主義を説き、「宗教対立の激化を避けよう」と（111）試みた者たちである。かりに協調主義 *Irenicism* あるいは協調主義運動として一括できるものが（「協調主義は宗教運動から出たものであるが、同時に、政治的な側面をも含んでいた」（111）とすればの話だが）、たとえそうした姿勢もまた暴力を召喚し混乱と統制強化を引き起こし対立をしずめるどころか激化させることもあったとはいえ、それこそが、当時の人文主義がめざすものであったと言えよう。そしてジョン・ディーについての研究書は、ディーの姿勢を「カトリック教徒とプロテスタント教徒を再統一するという……宗教的ヘルメス主義と、宥和的で教会合同を目指すもの」（フレンチ 131）と述べているが、もしこれが正しいのなら、ディーのオカルト哲学もまた人文主義と連動して宗教分裂の激化を押しとどめ融和と合同とを求めるものであった。また、そこからディーも、ディーと親交のあったシドニーも、同じ理想を共有していたことがわかり、また同じところに吸引されていった。すなわち人文主義と魔術の帝国として盛名をはせつつ、ラディカルな教会分裂派からは非難されつつも同時に宗教的融和と共存を保つことのできたボヘミアへ。

かなり大雑把な図式だが、宗教改革から30年戦争までの込み入った宗教情勢を簡潔にま

とめれば、ジュネーヴにはじまるカリヴィニズムの波はフランス、低地三国、ポーランド、ハンガリー、ボヘミアを席卷するが、1570年代80年代におけるカトリック勢力の対抗宗教改革の波がイエズス会の活動ともなってボヘミアに到来し、プロテスタント領主とカトリック領主との対立が激化する気配をみせ、「〔神聖ローマ帝国内における信教の自由を規定した〕アウグスブルク協定は、帝国内の宗派争いに終止符を打つものだったが、いまや、暫定的で脆弱なものにみえるようになった。しかし大きな戦争は避けられていた。帝国に対するボヘミアの反乱が帝国全体を聴きに陥れた1818年までは」(Doran 2004: 29)。三十年戦争勃発までは、プロテスタントカトリック両派の波は、ここボヘミアで出会うことになったのだが、それが正面衝突ではなく、たとえ束の間であれ共存と宥和と共存状態をもたらしたということだろうか。マクシミリアン二世の寛容主義をルドルフ二世が積極的に継承したかどうかは別にして、その魔術の帝国は、宗教対立を超えた思想と文化の実践を要請し、それがおのずと寛容主義の実現を可能にしたのではないか。

シェイクスピアは、こうしたボヘミアの状況を、知悉していたというよりも、同時代の文人や知識人たちと共有していたとみることはできる。ただしボヘミアへのまなざしは、ボヘミアにおいてカトリック勢力が17世紀に入ってから勢力を拡大したために、カトリック革命あるいはカトリック支配を希求するものではなく、あくまでも宗教的共存、信教の自由の継承であったように思われる。シェイクスピアが隠れカトリックだったとしても、またシェイクスピアの属する貴族サークルが、プロテスタント派のシドニー・サークルではなくカトリック系のエセックス伯ロバート・デヴルーのサークルであったとしても、また同時代の劇作家の作品が明白なプロテスタント性を誇示し、ローマ教皇批判を前面に出しているのに対して、シェイクスピアの場合、聖職者(旧教の修道士たちなど)への明白な揶揄などは存在しないとしても(Marotti 227)、だからといってシェイクスピアをラディカルなカトリックあるいは国境忌避者と決めつけることはできない。シェイクスピアのカトリック性が重視されるにつれ、カトリック勢力は牽強附会的な解釈やシェイクスピアを宗教戦争の闘士に仕立て上げる考察が多くなっているようにも思われるが、シェイクスピアも寛容と協調を、宗教的共存、信教の自由という中道主義を志向したといえるだろう(Marotti 225)。もしそうなら、シェイクスピアはボヘミアを、宗教的対立をまぬがれているユートピアとみたとしてもおかしくない。つまりボヘミアに海岸を設けてもおかしくないのである。

最初に述べていることと矛盾するかもしれないが、シェイクスピアは地理に、あるいは少なくとも世界地図に詳しかった。当時の最新の世界地図を見ていたふしがある<sup>10</sup>。いっぽうで地理的なミス指摘されつつ、もういっぽうで、世界地図に知悉していたシェイクピア。もちろん真相はわからない。ただ、すでに述べたようにボヘミアの海岸をただのミスとした場合、腑に落ちないところもある。むしろ、意図的に海岸を設けたとしたら、それはボヘミアを安全な避難場所(Safe Haven)と意味づけるための比喩的表象とすることができる。ボヘミアは奇跡的な宗教的共存が実現していた稀有な理想郷だったのである。

エヴァンズの著作で、エドモンド・キャンピオンの扱いが弱いことは、キャンピオンがまさ



に筋金入りのカトリックで、イエズス会士としての活動は、宗教的対立の緩和どころか激化をもたらすことになったとみられたせいかもしれない。チャンピオンにとって、ボヘミアはウィクリフによって汚染された地でしかなかった。しかしネーデルランドのジェットフェンで、カトリックのスペイン軍との戦いで落命したプロテスタント軍（ネーデルランドとイングランドの連合軍）のフィリップ・シドニーをエヴァンズが協調主義者というのなら（その主張が間違っているということではない）、1581年イングランドに潜伏して布教中に逮捕され処刑されたイエズス会士のエドモンド・チャンピオンもまた、本来、深い古典的教養に裏付けられた人文主義者でもあって、大学在籍中から、国家の中樞で活動すべく将来を嘱望されていたし、投獄中も、改宗すれば宮廷に取り立てるとエリザベス女王からも望まれていた人物であってみれば、協調主義を否定するラディカルなカトリックではなく穏健派だったとみることができる。チャンピオンは、ある手紙のなかで、プラハでフィリップ・シドニーと話し合ったことについて触れ（シドニーが会いに行ったほど、チャンピオンはイングランド時代から名声に包まれていたのだ）、この優れた若者がカトリックに改宗してくれればと願望を述べたあと、ボヘミアについて「異端のごみの山と集合体」であるが、重要な人々はカトリックであり、下層民たちは節操がないが、「自分としては、ウィクリフが人々を汚染して以来のイングランド人として大いに楽しみながら仕事をしている」と述べている（Simpson 123<sup>11</sup>）。楽しみながら仕事をしているのは、この地がカトリックの聖地ではなく、複数の宗派が共存できる協調主義の聖地だったからである。ウィクリフに汚染される以前の楽園的世界を希求するチャンピオンにとって、同時に、ここはまた迫害され追放されることのない楽園でもあった。ロバート・アーデン（ウォリックシャー）宛ての手紙のなかで、「この点に関して〔ふたりがイエズス会士として共通の使命に奉仕していること〕、私たちは異端者にして迫害者たちに負うところが大きいのです。彼らによって私たちは追われ、そして、心地よい、祝福された岸辺にそっと打ち上げられたのですから For this at least we are indebted to those whose heresy and persecution we have been driven forth and cast gently on a pleasant and blessed shore」（Simpson 121<sup>12</sup>）。‘blessed shore’とはどこだろう。イエズス会士として活動することの運命の岸辺なのか、あるいはプラハの中心部を流れるヴルタヴァ川（ドイツ語名：モルダウ）の川岸のことなのだろうか。あるいは、おそらくこれがもっとも真意に近いように思うのだが、新天地ボヘミアの岸辺、安全な避難場所・寄港地の接岸地、協調主義の稀有な理想郷の海岸ではないだろうか。チャンピオンもまたボヘミアに海岸を設けたのである。祝福された岸辺として。

## 多島海

『冬の夜話』は、一応対照性を刻印された二つの場所シチリアを舞台とする。材源となったグリーンの『パンドスト』ではボヘミア→シチリア→ボヘミアと展開するが、『冬の夜話』ではシチリア→ボヘミア→シチリアへと展開する。シチリアは、前者では牧歌的アルカディア的楽園として指定されるが、後者では嫉妬に狂った国王の妄想によって犠牲者が出る寒々とした冬の世界となる。そして後者では、そのぶんボヘミアが牧歌的楽園になる。ただし、ボヘミア

にせよシチリアにせよ、両作品ではイメージががらりとかわる。しかしシチリアに関しては、両面性は、すでに確立していた。それに比してイメージが流動的なのはボヘミアのほうである。この点について考えてみる。

『パンドスト』においてシチリアが牧歌的楽園のイメージで語られるのは、異例のことではない。その神話的トポスはアルカディア的世界であったからだ (Marrapodi, 214)。しかし『冬の夜話』にみられるような、嫉妬と妄想、陰謀と死に彩られた暗黒の宮廷世界という、アルカディアとは背馳するようなイメージもまたシチリアにふさわしいものであった。凶暴な火山エトナ山はシチリアにある。オデュセウスをまどわしたセイレーヌのいる島も、シチリアではないが、その近辺にある。そして究極の選択を意味する伝説上の怪物スキュラとカリュブデスががいるのはメッシーナ海峡（イタリアとシチリアの間にある）であった (Marrapodi 216; Matei-Chesnoiu 175-77)。シチリア人は、神話的イメージの世界では、激昂しやすく、妄想にまどわされやすい。シチリアの為政者には暴君で名を馳せた君主が多く、ディオニュシオ一世あるいは大ディオニュシオス (c.432BC-367BC) とその子ディオニュシオス二世あるいは小ディオニュシオス (397BC-343BC) の暴君ぶりは神話化伝説化された。『冬の夜話』において嫉妬と猜疑心により暴君と化すシチリア王レオンティーズは、シチリアの古代史上の暴君を彷彿させる (シチリアのシラクサは『走れメロス』の舞台であり、その暴君はディオニュシオス一世である)。三角島であるシチリアにシチリア王と王妃とボヘミア王の三角関係をみる観点もある (Matei-Chesnoiu 177)。シェイクスピアはグリーンが利用しなかった暗黒面のシチリアに訴えたのだが、そのつけもあって、劇の最後における奇跡的な復活と出会いは、本来、ボヘミアにこそふさわしいのにシチリアで生起することになった。かつて種村季弘がロイヤル・シェイクスピア・カンパニーのトレヴァー・ナン演出の『冬物語』の舞台に触発されて、子供部屋の玩具が自動人形化して動き出す驚異の魔術的世界のなかで展開する死と再生、あるいは死から不死への儀礼として語った『冬の夜話』の世界と、その大団円（「和解のうちに没落してゆく世界。流血と殺傷の可能であった人間の世界から、時間の網の目を食い破って、流血が起こりえない人形の世界へと無時間の清浄な母胎が一切を引き取るにいたる半人形劇」 (種村 1987:252)）は、北方のマニエリスムの魔術の帝国にこそ、ルドルフ二世の「驚異の部屋」(シャイヒャー (1979,1990) 参照) にこそ、ふさわしい奇跡的光輝に包まれる「人形＝女神像の主宰する超自然的脅威空間」であるのだが（事実、ボヘミアでの出来事のように種村は語っているように思われる）、シェイクスピアの場合、シチリアでの出来事に変えられている（また「冥府に誘拐されたプロセルピーナの帰還を請願するボヘミアの春祭りの民衆の祝祭空間」(種村 252) は、逆に、神話伝承的にも、本来シチリア的空間だが (Marrapodi 221)、シェイクスピアがそれをボヘミアに変えた)。そもそもシェイクスピアの戯曲にあっては、ボヘミアが、羊の毛刈り祭り直後の、春の陽光を経て夏を迎えつつある牧歌的シチリア的世界に変えられている。ボヘミアの冬に対してシチリアは夏のはずが逆転している。もちろん、ボヘミアにおけるボヘミア性も確保されてはいて、シェイクスピアの戯曲ではボヘミアのバロック的祝祭空間のなかでオートリカスという行商人に扮した詐欺師／道化役が活躍するの

だが、このオートリカスには、ボヘミアのジプシー／ロマの面影があるという説もある（ボヘミア人 Bohemian は当時「放浪のジプシー／ロマ」を意味していた（Matei-Chesnoiu 180））、おそらくそれよりももっと有力な説明は、オートリカスの演技と役割こそ、「ピッケルヘリング」と呼ばれた道化役を強くイメージさせることで、中欧・東欧性を確保しているとみることができ。この「ピッケルヘリング」は、ドイツ語圏の道化役の慣習的な名前なのだが、語源は英語であり、これは16世紀から17世紀に大陸に巡業してイングランドの旅役者たちの道化役が好評をもってむかえられたことによる<sup>13</sup>。かくして、そのオートリカスというピッケルヘリングが、『冬の夜話』ではボヘミアの海岸からシチリアの海岸に移動するのである。

たとえグリーンの『パンドスト』を知らなくともシェイクスピアの『冬の夜話』が、ボヘミアとシチリアのトポスのイメージにひねりを加えていることがわかる。シチリアがボヘミア化し、ボヘミアがシチリア化しているのである。それがなぜかを問うよりも、そのような変容を希求する世界をシェイクスピアが設定したことが重要だろう。『冬の夜話』の舞台は、ボヘミアの海岸を考慮に入れば、ボヘミア島とシチリア島の二つの島を舞台に展開するのである。そして劇の冒頭で大きな違いがある（‘great difference between our Bohemia and your Sicilia’ 1.1.3-4）と語られるシチリアとボヘミアも、劇の最後では、神聖詐術と祝祭から析出される半人形劇の人工楽園の奇跡的空間を舞台とすることで、つまりボヘミア化したシチリアを舞台にすることで、ボヘミアとシチリアの融合あるいは共存が生起するのである。

海に浮かぶ二つの島。対照的なこの島は、途中で不和の種によって長く断絶状態にあったが、若い世代の行動によって、二つの島がふたたび友好的な関係をむすぶにいたる。そのとき両島は、互いに相手の特徴を色濃く帯びるようになっていた。ここにある、ふたつの島の離反と融合の物語は、ひるがえれば、まさにイングランドとスコットランドの物語にも読み替えられる。スコットランド国王ジェームズ六世がジェームズ一世としてイングランド王に即位して以来、スコットランドとイングランド両国との友好的関係を樹立するための文化的営為が、アイルランド関係の政治をも巻き込みながら、1707年の連合法によって、イングランドとスコットランドが合邦化するまで続いたことをジョン・ケリガンは考察している（Kerrigan 2008）。国王一座の座付き作家としてのシェイクスピアの活動のなかで一連の晩年のロマンス劇において、とりわけ『シンベリン』『冬の夜話』『テンペスト』において、スコットランドとイングランドとの融和をめぐる物語が通奏低音のように流れていることは、ケリガン自身は指摘していないが、発見することはむづかしくない。ボヘミア島とシチリア島との離反と宥和の物語は、スコットランドとイングランドの物語にも読み替えられる要素をもっている。たとえば、それが考察の中心ではなく、むしろ周辺に属することなのだが、『魔術の帝国』のエヴァンズは、そのなかでやや脱線的にルドルフ二世とイングランドのジェームズ一世とを比較し論じている（102-105）。やや無理のある比較だが、ただ、ともに学究的かつ文化振興に熱心で魔術的世界にも造詣が深い君主の政治手法に類似点がないわけではない。そしてここにボヘミアが海岸をもつようになれば、海上に浮かぶ孤島イングランドとボヘミアとのあいだには、たとえ目覚ましいとはいえないくとも、ある種の類似性が発生することは避けられないだろう。そしてイングリ

ドを浮かべる海は、スコットランドをも擁する（ただしスコットランドは島ではないが）多島海であり、宥和と共存の表象としての多島海の重要性を考慮すれば、ボヘミアとシチリアの物語は、イングランドとスコットランドの物語にも読み替えることができる。どちらの物語にも島嶼と多島海が、その存在を誇示している。

そもそもトマス・モアのユートピアは、南大西洋に浮かぶユートピア島であって、以来、ユートピア幻想は、海のかなたの地、あるいは島嶼としてのユートピアを常に前提としてきた。シェイクスピア時代におけるイングランド産のいまひとつのユートピア物語であるフランシス・ベーコンの『ニュー・アトランティス』もまた、海のかなたの島国ベンサレムをユートピア島としているのであって、ユートピアの有力なトポスのひとつが島であることはまちがいない。またこのトポスは、イングランドという島国をユートピア化しやすかったのは、『リチャード二世』で語られるイングランドあるいはブリテン島の楽園のイメージからもあきらかだ（… This precious stone set in the silver sea<sup>2</sup>.1.46）。ユートピアとはどこにもない場所ではなく、海に浮かぶ島なのである。当然、ユートピアには海岸が要請される。海岸なくしてユートピアはない。

エデュアル・グリッソンが「私の命題は、今日、全世界が列島化しクレオール化しているということだ」（グリッソン 185）というとき、一体化、一極集中化、中心化、一元化のなかで停滞を余儀なくされる世界に亀裂を入れ、新たな未来を拓くような、多様性と多元化の可能性の中心が、クレオール化現象として全世界に波及しつつあることを、希望的観測も含めて「全世界がクレオール化している」と述べているわけだが、そのときクレオール化とあわせて、グリッソン出身のアンティル諸島あるいはカリブ海の諸島の形状にも光があてられ、それが現象の名称となっている——「列島」「列島化」と（諸島、多島海なども表現できるだろう）。これはクレオール化を空間的表象に翻訳したものだが、ユートピアが海岸をもつ島であるという「島嶼ユートピア」という私たちの知見に、さらに、統一的共同体の実現ではなく多様な複数の共同体の共存をユートピア的とらえ、群島、諸島、列島をいまひとつのユートピア形態あるいはユートピア島の変容としてみる知見を加えることができる。例えば、シェイクスピアが海岸を設けたボヘミアは、複数の宗教が競合しながらも共存する、いずれの信徒にとっても〈安全な避難地 Safe Haven〉であった。もしシェイクスピアの海岸建設が、ボヘミアを、そのような安全な避難場所、寄港地であることを顕在化する行為であったとすれば、これはボヘミアが、その内部において、列島化・多島海化していたということになる。ボヘミアそのものが、多くの島を集い合わせ共存させる多島海であり列島化していた<sup>14</sup>。

そしてこの多島海、列島化表象を強力に支えたのが、シェイクスピア時代におけるイングランドとスコットランドの多島海における共存展望（二つの地域は陸続きで島嶼状態ではないのだが）であったとはいえよう。それをさらに支援するかのよう、物語そのものも、ボヘミア島とシチリア島の関係性のなかで展開する。『冬の夜話』は、ボヘミア島とシチリア島を擁する多島海で展開する。この両者、最初は大きな隔たりのある国だった両国も多島海を通しての交流のなかで、互いに歩み寄り類似性を帯びつつ、その大きな差異によって悲劇を喜劇にかえる変容のドラマを実現していたのである。悲喜劇という名の多島海。それゆえ、ボヘミア



の海岸は、ユートピアとしてのボヘミア表象の契機となるだけでなく、多島海というユートピアの発展形の表象をも準備していたのである。

もちろん、こうしたことはボヘミアの人びとにとっては、どうでもいいことである。ボヘミア地域は、歴史的において、多くの無責任かつ荒唐無稽なイメージ化あるいは投影に曝されてきた。そうしたプロジェクションは、ボヘミアの人たちにとっては、誇らしいというよりも、黒歴史に近いような忌まわしさすらもつだらう（「ボヘミア人」は、かつて「放浪のロマ」の意味をもち、やがては「ボヘミアン」へと発展あるいは悪化し、さらにはヨーロッパの中央に位置しながら、ヨーロッパ人ではないかのような見方もされた（Sayer 8））。しかし歴史は、事実と想像から、現象と夢想から、現実とイメージからなる。いかに荒唐無稽なものであっても、また無関係なものであっても、他者による表象もまた、歴史の一部である。これは、歴史は、たとえ誇らしいものではなく忌まわしいものであっても、いまひとつの分身的な歴史をもつ。文学にたとえてみれば、作品の意味と評価は、作品そのものだけではなく、その受容と翻案によっても形成される。いいかえれば分身もまた本体なのだ。作品の受容もまた作品の一部なのだ。本稿は、ボヘミアという作品の受容史の一部である。

エピローグあるいはプロローグ

… what's past is prologue, what to come

In yours and my charge.

Shakespeare, *The Tempest*, 2.1.258-9.

ボヘミアとシチリアを舞台に展開する『冬の夜話』は、〈北〉と〈冬〉のイメージが強すぎて、シチリアの〈南〉と〈夏〉が忘れ去られるところがあるが、しかし、この作品はまぎれもなく〈北〉と〈南〉を、〈冬〉と〈夏〉を、両極の〈相反するものの一致〉〈不一致の一致〉あるいは逆説的な共存の美学のなかに包摂している……。ならばここでグスタフ・ルネ・ホッケの『迷宮としての世界』を思い出さずにはいられない。イタリアのマニエリスム美術からはじまる考察はボヘミアのルドルフ二世のマニエリスムの世界において、その頂点に達するといってもいい。だが、ここまでくると、ホッケから、私がどこに漂着しようとしているか、察しがつく読者もいよう。そう、ドイツ、北方マニエリスム、バロックのイメージの強いホッケは、実のところ 1937 年以來、イタリアの研究家、それもマグナ・グラエキア（古代ギリシアの植民市であったイタリア南部、それも長靴の底からシチリアにかけての地域）の文化と歴史の専門家であった。ボヘミアとマグナ・グラエキア（シチリア）は、奇しくもホッケのなかでつながっていた。ホッケの小説の体裁をとった旅行記『マグナ・グラエキア——ギリシア的南部イタリア遍歴』（1960）の原型となった『消え失せた顔』が出版されたのが 1939 年、それを改稿・加筆版の『マグナ・グラエキア』の出版が 1960 年、この間には「消え失せた顔」があり、それはナチズム、ファシズムに対する危機意識だとも考えられるが、危機意識は、しかし 1960 年段階における冷戦時代のなかで、決して消え失せることはなかっただろう。『迷宮としての世界』もそうだが、ホッケはつねに政治的あるいはユートピア希求的であって、そこに

はつねに荒ぶる野蛮（ホッケの比喻を使えばレヴィヤタン）との静かな戦いが継続していた。その意味で、ホッケのボヘミアもホッケのシチリア（あるいはイタリア南部）も、海に浮かぶ島々である。それは怒れる海、あるいは海の怪物レヴィヤタン／リヴァイアサンから文明を守る避難場所であると同時に、その海を通して、異なる民族を、異なる文化を集わせる寄港地でもある。ホッケのユートピアは、ボヘミアが、あるいはシチリアが、マグナ・グラエキアがそうであったように、単一民族の排他的強制的統一社会ではなくて、多様な民族と文化が共存し交通してつくりあげる異種混淆的社会であり歴史なのである。ヨーロッパの中央に位置する、ルドルフ二世のボヘミアがそうであった。それは内部が多島海化したハイブリッド社会であった。そしてマグナ・グラエキアも共存と交流と異種混淆の場であり、シチリアという島は、その象徴性を一身に体現しているといえよう。そしてホッケのなかにあっても、ボヘミア島とシチリア島とは多島海の中で、独立しつつ共存していた。

おそらく『冬の夜話』の次に書かれたシェイクスピアの『テンペスト』では、ナポリ王の一行がアフリカから帰国の途中、嵐に巻き込まれ島に漂着する。その島は、追放された魔術師プロスペロが統べる島だった。最初に述べたように、弟に追放されたプロスペロにはルドルフ二世の影がある。このプロスペロの魔術の島は、ボヘミアを思わせるところがある。ただしアフリカとナポリの航路の中間に位置するこの島はまた、地理的關係にすればシチリア島を思わせる。プロスペロの島において、ボヘミア島とシチリア島とが重なる<sup>15</sup>。『冬の夜話』のボヘミアとシチリアをめぐる多島海の物語は終わってはいないのである。

## 注

1. 引用は、この事件を扱ったオーストリアの詩人・作家のフランツ・グリルパルツァー (Franz Grillparzer, 1791 - 1872) の戯曲のタイトル。有名な作品だが英訳、日本語訳はない。なお『テンペスト』の兄弟プロットとこの事件の類似性は Duncan-Jones(1991:116) でも触れられている。当時から現在にいたるルドルフ二世 (プロスペロのモデルか?) のイメージは、おおむねつぎのようなものだろう——「ルドルフは、芸術と自然の探求にあまり身を入れすぎてすべてをぶちこわしにしてしまった。その熱意はまさに度を越していた。国事はそっちのけで、錬金術の実験室、画家のアトリエ、時計職人たちの工房だけが、彼の関心の的であった。挙句の果てには、宮殿全体をこうしたことに提供し、ありったけの歳費をそれらに注ぎ込むありさまだった……」(エヴァンズ 62)。新世界表象と関連付けて論じられるようになった『テンペスト』の旧世界性との関連は Wilson (2004:206-25) 参照。

2. *The Winter's Tale* は『冬物語』と訳されることが多いが、原義は、冬の炉端で老婆が子供たちにする幻想的な怪談話のことで、劇中にも「悲しい／怖い話は冬が一番」'A sad tale's best for winter' (2.1.25) という台詞がある。前半のシチリアの場面は冬のようなのだが、後半の季節は冬ではないため、『冬の夜話』と表記する。「ふゆのよばなし」とも、「ふゆのやわ」とも、どちらの読み方も許容できる。なお引用はアーデン版 (Shakespeare 2012) による。またシェイクスピアの他作品からの引用はオックスフォード版全集第二版 (Shakespeare 2004) による。創作年代は 1610-11 と考えられている。またエリザベスとファルツ選帝侯との婚礼の場で『テンペスト』とともに上演された。

3. 脱線だが、ダナ・ハラウェイの『伴侶種宣言』(永野文香訳、以文社、2013) のなかに、ヨーロッパにおける生態系復元運動において「ピレネー山脈ではフランス政府がスロヴァキアからヒグマを迎え入れた」(122) という記述があった。

4. 『冬の夜話』のなかで突如出現する熊に追われて退場するというやや荒唐無稽な演出で悪名高いこの場面については、熊がロマンスやロマンス劇に常套的なモチーフであること、前半の悲劇的場面から後半の喜劇的場面への転換・転調を可能ならしめる演劇装置であることを強調する考察が一般的である。オーゲルの解説が短いながらこの点は意を尽くしている (Shakespeare 1999:37-40)。ただし熊はロマンスに登場するエキゾチックな動物というだけでなく、熊いじめ Bear-baiting 場での大規模なアトラクションでおなじみの動物でもあった。熊いじめのアトラクションの意味については Höfele (2011) の刺激的な考察があり、それに触発されたかたちで私は別のところで『冬の夜話』における熊の登場を、グローブ座の隣の熊いじめ場の熊が逃げて紛れ込んだというパニック効果 (ラカン的に言えば現実界の介入) として考えたことがある。ちなみに 17 世紀に入ってから内乱直前に描かれたロンドンの大パノラマ地図で描かれたグローブ座とそのとなりの熊いじめ場の建物の形状が似ているので、建物表示が入れ替わったこと——グローブ座が熊いじめ場と表記された (後の版では訂正された) ——は、英文学史・シェイクスピア演劇史上で有名な話だが、偶然の一致とはいえ、そのパノラマ図を描いたエッチング版画家がボヘミア出身のウェンツェスラス・ホラー Václav Hollar / Wenceslaus or Wenceslas Hollar(1607-1677) であることは興味深い。

5. 「スイス海軍」はともかくとして、ジョージ・オーウェルのルポのタイトル『ウィガン波止場への道』からウィガン波止場 (Wigan Pier) が実在しているように思う読者がいるかもしれないが、ウィガンは内陸北部の炭鉱町で海に接してはいない。

6. *Pandosto* の本文は Bullough (1975:156-199) で読むことができる。引用はこの版より。ただしオックスフォード版の付録 (本文は Stanley Wells が用意) やアーデン版の付録 (Bullough の本文を再録) でも

読むことができ、日本語訳（グリーン 1972）もある。

7. 物語は、このあと、シチリアから到来したドラトゥスとフォーニアに会ったボヘミア王パンドストは、怪しい二人を投獄するとともに、フォーニアのあまりの美しさ（亡き妻に生き写しであることも惹かれたことの原因だが）に、彼女に言い寄り拒絶される。そこにシチリアからの別の一行がボヘミアに到着し、ドラトゥスがシチリアの王子であること、フォーニアも、パンドストの娘であることがわかり、若い二人は祝福され結ばれることになるが、婚礼に沸き立つボヘミアの宮殿で、それとは知らぬままに実の娘に言い寄ったことを恥じ自らの罪に報いるためパンドストは自殺する。シェイクスピアの『冬の夜話』とは異なり、若い二人の結婚で終わるとみえて、悲劇的な結末を迎えるのである。

8. ジュリオ・ローマーノについては、かつて、その代表的建築の写真集が刊行されていた。磯崎新＋篠山紀信『マニエリスムの館——パラッツォ・デル・テ』建築行脚 8（六曜社 1980）。この文献中にある長尾重武「愛と政治の館」（129-178）が有益。ただ最近では日本語の文献において「パラッツォ・テ」と表記されることが多く、こちらが適切な表記となったのだろうか。

9. アブラハム・オルテリウス (Abraham Ortelius 1527-97) は最初、「世界地図〈マップ・ムンディ〉」を作ったが、やがて近代的な世界地図を「世界劇場」*Theatrum Orbis Terrarum* と名付けて出版した。劇場で、空間あるいは地域を意味させたのだが、当時、「劇場」と「世界」「世界像」とは文化的な結びつきを強めることになった (Gilles 71-73 参照)。

10. もっとも有名な例は、『十二夜』*The Twelfth Night* における台詞の中で顔にできる笑い皺を世界地図における新大陸の航路図の線にたとえたことだろう (3.2.74-75)。Gillies の指摘するように、シェイクスピア劇は中世的コスモロジーを引きずっているが、同時に、当時の世界地理についての発見にも開かれ、新大陸などに関する新情報に満ちていた。

11. キャンピオンの伝記は、イヴリン・ウォーによる比較的短い伝記（日本語訳もある）以外は、いまなお 19 世紀末に出版された、このシンプソンのものが唯一の本格的な伝記である。

12. キャンピオンのこの書簡に注意を喚起してくれたのは Thomas (2007:) である。Thomas は、そのなかのフレーズ 'blessed shore' を自己の著作のタイトルとしている。

ちなみに、キャンピオンが手紙を書いているロバート・アーデン（ウォリックシャー）とは誰なのか不明なのだが、ウォリックシャー出身ということは、かの地で名高いアーデン一族の一人なのだろう。アーデン一族にはロバートは多い。このアーデン家、ノルマン・コンクウェストにまでさかのぼる、フランス出身の名門で、筋金入りのカトリック。一族のなかにはカトリックの大義に奉じて処刑された者もいる。そしていうまでもなくシェイクスピアの母方の家系でもあり、シェイクスピアの母メアリーの父親はロバート・アーデン（今問題にしているロバート・アーデンではないが）だった。

13. Sřřbrnř 17-24. このピッケルヘリングに関する考察は、この文献における重要な論証のひとつであり、それは全体で三つある図版のひとつが 1621 年に描かれたピッケルヘリング像であることから歴然としている。

14. 蛇足ながら、港や海岸のない地形に、海、港、船をもってくる例としては、ひとつはオーゲルが紹介しているボヘミア王ヴァーツラフ四世 (Vřřclav IV 1361-1419) が、ボヘミアを嵐に翻弄される船にたとえていたこと (Shakespeare 1996:39)。そしていまひとつの例として、麻生香太郎作詞・作曲、森進一の演歌『新宿みなと町』(1979) がある。

15. もちろんこう語ったからといって、保守派のシェイクスピア研究者のように、『テンペスト』における新世界・新大陸表象を排除して旧世界あるいは古典古代へと結び付けようとするつもりはない。場



所には、さまざまなイメージが排除されることなく抹消されることなく上書きされるべきであって、場所あるいはトポスの研究、さらには空間研究もまた、多島海的となり、ハイブリッド性の展開の場となるべきなのだから。

#### 引用・参考文献

- Bullough, Geoffrey(ed). *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, Vol. VIII. London: Routledge & Kegan Paul, 1975.
- Doran, Susan. 'The Politics of Renaissance Europe', *Shakespeare and Renaissance Europe*, edited by Andrew Hadfield and Paul Hammond, Arden Critical Companions. London: Bloomsbury, 2004, 21-52.
- Dunan-Jones, Katherine. *Sir Philip Sidney: Courtier Poet*. London: Hamish Hamilton, 1991.
- Dussen, Michael Van. *From England to Bohemia: Heresy and Communication in Later Middle Ages*. Cambridge: Cambridge University Press, 2012.
- Laroque, François. 'Shakespeare's Imaginary Geography', *Shakespeare and Renaissance Europe*, edited by Andrew Hadfield and Paul Hammond, Arden Critical Companions. London: Bloomsbury, 2004, 193-219.
- Gillies, John. *Shakespeare and the Geography of Difference*. Cambridge: Cambridge University Press, 1994.
- Höfele, Andreas. *Stage, Stake, and Scaffold: Humans & Animals in Shakespeare's Theatre*. Oxford: Oxford University Press, 2011.
- Kerrigan, John. *Archipelagic English: Literature, History, and Politics 1603-1707*. Oxford: Oxford U. Pr., 2008.
- Matei-Chesnoiu, Monica. *Early Modern Drama and the Eastern European Elsewhere: Representations of Liminal Locality in Shakespeare and his Contemporaries*. Madison: Fairleigh Dickson University Press, 2009.
- Marotti, Arthur, 'Shakespeare and Catholicism', *Theatre and Religion: Lancastrian Shakespeare*, ed. by Richard Dutton, Alison Findley and Richard Wilson. Manchester: Manchester U. Pr., 2003, 218-241.
- Marrapodi, Michele. 'Of That Fatal Country': Sicily and the Rhetoric of Topography in *The Winter's Tale*'. *Shakespeare's Italy: Functions of Italian Locations in Renaissance Drama*, edited by Michele Marrapodi, A. J. Henselaars, Marcellp Cappuzzo, and Falon Sanctucci. Manchester: Manchester U. P., 1993: 213-228.
- Sayer, David. *The Coasts of Bohemia: A Czech History*. Princeton: Princeton U. Pr., 1998.
- Shakespeare, William. *The Complete Works*, Second Edition, General Editors Stanley Wells and Gary Taylor. Oxford: Oxford University Press, 2005.
- Shakespeare, William. *The Winter's Tale*, edited by John Pitcher, The Arden Shakespeare, Third Series. London: Methuen Drama, A & C Black Publishers, 2010.
- Shakespeare, William. *The Winter's Tale*, edited by Stephen Orgel, The Oxford Shakespeare. Oxford: Oxford University Press, 1996.
- Simpson, Richard. *Edmund Campion: A Biography*. London: John Hodges, 1896.
- Stříbrný, Zdeněk. Shakespeare and Eastern Europe, Oxford Shakespeare Topics. Oxford: Oxford University Press, 2000.
- Thomas, Alfred. *A Blessed Shore: England and Bohemia from Chaucer to Shakespeare*. Ithaca: Cornell University Press, 2007.
- Wilson, Richard. *Secret Shakespeare: Studies in Theatre, Religion and Resistance*. Manchester: Manchester

University Press, 2004.

イエイツ、フランシス『シェイクスピア最後の夢』[1975] 藤田実訳 (晶文社 1980)。

磯崎新+篠山紀信『マニエリスムの館——パラッツォ・デル・テ』建築行脚8 (六曜社 1980)。

エヴァンズ、R. J. W.『魔術の帝国——ルドルフ二世とその世界』[1973] 中野春男訳 (平凡社 1988)。

種村季弘「鉱物の花嫁」『怪物の解剖学』[1974] (河出文庫 1987) 所収 243-264。

グリッサン、エドゥアール『全一世界論』[1997] 恒川邦夫訳 (みすず書房 2000)。

グリーンブラット、スティーヴン『シェイクスピアの驚異の成功物語』[2005] 河合祥一郎訳 (白水社 2006)。

シャイヒャー、エリーザベト『驚異の部屋』[1990] 松井隆夫・松下ゆう子訳 (平凡社 1990)。

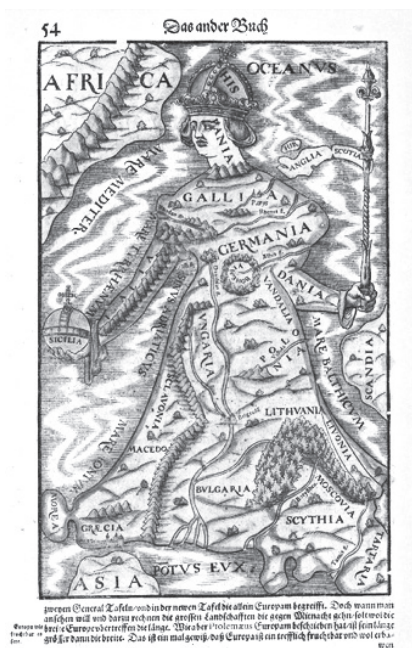
グリーン、ロバート『パンドスト王・いかさま案内他』多田幸蔵訳 (北星堂 1972)。

フレンチ、ピーター『ジョン・ディー——エリザベス朝の魔術師』[1972] 高橋誠訳 (平凡社 1989)。

ホッケ、グスタフ・ルネ『迷宮としての世界 (上・下)』[1957] 種村季弘・矢川澄子訳 (岩波文庫 2010)。

ホッケ、グスタフ・ルネ『マグナ・グラエキア——ギリシア的南部イタリア遍歴』[1960] 種村季弘訳 (平凡社ライブラリー 2013)。

### 【付録】



マニエリスム期に流行したヨーロッパを人間(女王)になぞらえる図像。エウロパ女王 Europa regina (英語 Queen Europe) と呼ばれる。この図は、セバスチャン・ミュンスターの *Cosmographia* (1540) より。この女王像では、ボヘミアは心臓にあたり、ユトランド半島が左手で、そこに王笏が握られ、イタリア半島は右腕で、その手に乗せられている宝珠(球体の上部に十字架があり、キリスト教国における権威の象徴)が、シチリアなのである。宝珠と心臓。ともに図像では円形。Laroque も指摘するように、ボヘミアとシチリアとの間には見えない絆があるように思われる。参考までに。

# The Coast of Bohemia

## William Shakespeare and Central Europe

OHASHI Youichi

---

The celebrated coast which William Shakespeare provided Bohemia in one of his last plays, *The Winter's Tale*, has been the subject of controversy over its cause, intention, function, and significance. The coast, the *locus classicus* of geographical confusion or ignorance of the early modern English people, also provoked various explorations of its possible interpretations from the jokes, conventional or metadramatic, through dramatic functions required by the twists and turns of the plot to some significant construction of the cultural images of this country in the heart of the continent. Given that Bohemia was a crucial hub of cultural transitions and exchanges, especially in the age of Rudolf II, emperor of the white magic and occult philosophy, then we can suppose that Shakespeare and his British contemporaries tried to give the land some privileged image and representation in the form of a fictional and imaginary coast. Bohemia also was open to every sect of religion, maintaining its tolerant attitudes in the age of the confessional war in those periods before the outbreak of the Thirty Years War. In the imaginary map of the world created and held by those who suffered from religious collisions and sought some religious harmony, Bohemia was definitely a safe haven for the refugees from the religious conflicts sweeping across European, an island utopia situated in the stormy sea or enchafed flood of religious crashes. Archipelagic utopia promoted for the unification of British isles or between Scotland and England in the seventeenth century as well as pastoral Arcadia, an image traditionally attached to Sicilia arguably played the important role of constructing Bohemia as a utopic island with its coasts surrounding itself. The imaginary and fictional coast of Bohemia, even though possibilities of some simple mistake or ignorant construction do not seem to be entirely eradicated, reveal some crucial moment of the history of cultural and religious exchange as well as utopic imaginations supposedly shared by the contemporary British people with the Bohemian people, a rare, if not miraculous, case of truth inspired by fiction.